



タイ社会の不正義を問う

「上」と「下」の対比から

タイ社会の不正義を問う ー「上」と「下」の対比からー

「アジアの現代文芸」シリーズ第51冊目の『罪との闘い』は、「タイ文学の巨匠」と称されるシーブーラパーの長編小説二編と短編小説一編が収録された作品である。財団法人大同生命国際文化基金より2008年に発行された。訳者はタイ文学の研究と翻訳を常に先導されてきた宇戸清治氏である。

シーブーラパーの本名はクラブ・サーイプラディットで、ラーマ5世の治世末期に当たる1905年にバンコクで生まれた(同書、273頁)。ラーマ5世といえばアジアやヨーロッパへ視察旅行を行い、タイの近代化を推し進めた人物である。この時期に英語からタイ語へと翻訳する文学活動が見られるようになり、その後タイの人々が長編外国語文学を翻訳するという流行が作られた。西洋文学の翻訳に加えて、ラーマ5世統治期は自ら小説を書くようにする人々が出現した時代でもあった(中央大学政策文化総合研究所、2002)。こうしたタイ文学の基盤が形成されつつあった時期にシーブーラパーが誕生したことも、彼の作家としての才能を育んだ要因に思える。シーブーラパーは、タイ国有鉄道の下級官吏の父のもとに生まれ、6歳で父と死別し、小さな裁縫店を営む母のもとで育てられた(宇戸、2014)。裕福な家庭とは言えなかったが、上流階級の子弟が多く通うタイの名門テーブシリオン学校に通学した経歴を持つ。自らは庶民の身分でありながら、中高一貫教育の過程で上流階級の子どもたちと触れ合ったことも、今日まで人々に影響を与えているシーブーラパーの思想を形成した要因ではないだろうか。

本書には、長編小説『また会う日まで』、『罪との闘い』、加えて短編小説『彼は目覚めた』の三編が収録されている。以下に各作品について詳しく見ていきたい。

長編小説『また会う日まで』は、タイの上流階級の家庭に生まれ育った青年が、オーストラリアでの社会運動家との出会いと留学経験を通して、タイの社会構造への疑問を募らせていく物語である。経済的に恵まれ、何不自由ないタイでの生活に誇りを感じていた青年コメートが、オーストラリアで出会った社会運動家ナンシーとの交友の中で、それがいかに愚かな考えだったかに気付く。そして自国の将来のために奔走しようとする変化がこの

作品の主題であり、コメートの精神的成長ぶりがシーブーラパーの筆を通して感じることができる。

本書では、具体的なオーストラリアの地名と共に、行く先々での美しい風景が詳細に記されている。それもそのはずで、著者であるシーブーラパーはオーストラリアに留学した経験を持ち、メルボルン大学で政治学を専攻していた。川辺でレイク・トラウトを釣った時の様子や、トラム(路面電車)から見える街路樹の葉の色の移り変わり、そしてツアーバスでラジオから流れる音楽や、運転手と乗客のやり取りなどが記されており、シーブーラパーの経験に基づくオーストラリア市街の描写などは読者の心を躍らせる。彼がオーストラリア留学を経験していたことを踏まえると、本書に出てくるオーストラリアの都市の名前や食べ物、風景などが空想の世界のものではないことは明らかであり、実際に彼が各都市を訪れ、その際の心情を基にして書いていることが分かる。本書を通してシーブーラパー自身の体験を彼と同時に味わっているような気分になり、彼の留學生活を垣間見ているようだ。地名が出てくるたびに地図や写真を検索しながら本書を読むと、より楽しむことができる。ぜひ実践してみてはいかがだろうか。

タイ人のコメートとオーストラリア人のドロシーの交友関係を中心に展開されるこの物語は、幾度となく人種差別の問題に触れる。おそらく、著者が身を持って感じた人種差別の経験を題材にしたと思われるこの内容はより説得力を持つ。本書はドロシーの視点から描かれているが、彼女はコメートのことを「肌の色がこの国(オーストラリア)の人間とは明らかに違う」「言葉も違っているように思えた」(13 頁)などと感じている。当初はコメートを「異邦人」と形容し、彼が流暢な英語を話すことが判明した際には、驚きうろたえる。さらに、コメートと一緒にゴルフを行う場面では、「アジア出身の彼が白人並みにゴルフになじんでいるとは思えなかった」(27 頁)とドロシーの心情が描かれている。一緒にラウンドを回るうちにコメートのゴルフの腕前が一流であることが判明し、ドロシーの心情が「コメートは同胞人(オーストラリア人)からの蔑視を軽く跳ね返した」(28 頁)というように記されている。このような記述に加えて、本書はオーストラリアが白豪主義を唱えていることにも触れつつ、有色人種を差別していた状況を示している。この点においても、著者であるシーブーラパーがオーストラリア留学で得た経験が反映されていると想像するのは容易であろう。実際に彼自身、留学中にオーストラリア入管当局の有色人種差別や白豪

主義の方針に反対する運動に参加している(宇戸、2014)。本書においても、コメートが「この国は肌の色が白くないわれわれを必ずしも歓迎していない」(78 頁)と話しており、それに対してドロシーは「政府と入国管理局のクローウェル局長を恨めしく思った」(78 頁)と感じており、実際の人物名を出しつつその心情が描かれている。まさに著者自身の体験が直接反映された物語となっているのである。本書では、オーストラリアに在住するアジア人を援助し友好を図る「イーストウェスト・コミュニティ」などの団体に所属するナンシーが重要な人物として登場し、社会にはびこる人種差別についてコメートに重要な示唆を与える。ナンシーはコメートにとって最も尊敬する人物として描かれており、彼女の言説が、当時の著者の考えであったのか、または同じ団体に所属していた人物をモデルにしたのかは分かりかねるが、シーブーラパー自身がオーストラリアにおいて懸命に人種差別撤廃運動を展開していたことは明らかである。

本書で特に強調されているメッセージは、タイの上流階級で生まれ育った青年コメートがオーストラリアでの経験、とりわけコメートやナンシーとの対話を通して、その価値観を変化させていく点である。社会の上層階級が民衆を徹底的に搾取しているタイと、どこに行こうと皆が同じような暮らしを送れるオーストラリアを対比し、タイ社会の悲惨さを書き記している。コメートはタイにいかにかひどい差別がはびこっているかをドロシーに説明する。タイの農民の教育不足を指摘し、病気になった際には未だに呪術に頼っている農村の痛ましさを物語るのだ。タイの農民がほんの一握りの上流階級に搾取されている現状を伝えながらも、タイの民衆がオーストラリアの人々と同じように政治に関与できる日が来ることへの希望を語る。実際に、この『また会う日まで』のようなオーストラリア留学から帰国後のシーブーラパー作品は、それ以前の作品と比べて明らかな変化が見られると指摘されている(宇戸、2014)。それは、著者自身がオーストラリアという外の世界と接触したことで、タイ社会への痛烈な批判が明確に表されるようになったことが理由ではないかと考える。シーブーラパーがオーストラリア滞在期間に学び取った本来の民主主義の在り方は、タイの社会的平等を目指す彼にとって大きな指標となったのであろう。

また、「死の鉄道」(33 頁)に関する描写からは、日本による泰緬鉄道の建設が現地の人々に深い傷を残したことを伺わせる。泰緬鉄道のことは「呪われた言葉」(33 頁)とされ、タイの人々にとってどれほど無残な出来事だったかを痛切に感じる。本書において、このことをわざわざ書き記していることは、シーブーラパーにとって衝撃的な出来事だったこと

を意味するのではないだろうか。しかし、泰緬鉄道に関しては、ほとんどの日本人がその事実を知らないまま過ごしている。タイの文学作品を通して、現地の社会だけでなく、こうした日本が残した負の遺産についても考えるきっかけになることは、日本人の私にとって大きな意味を持つと感じた。続いて、短編小説『彼は目覚めた』では、タイの底辺社会で生きる人力三輪車漕ぎの男性が、一般民衆の力でも政府に対抗できることを学び、声を上げることの重要性に気付く物語である。本書では、貧富の差がより明確に描かれており、冒頭で登場する高級外車を乗り回す人々とは対照的に、悪臭漂う掘っ建て小屋同然の借家で暮らす主人公一家の姿が対比されている。ここでは、社会の底辺で暮らす家族の父親アムの視点から物語が展開されていく。アムとその妻ニムは、自らの貧しい状況を嘆きつつも、その状態が引きはがすことのできない人生の一部だと考えている。このような描写から、貧しい人々の上昇志向を読み取ることは困難であり、より上の社会階層に移るという望みすら無いように思えた。そのような諦めの気持ちと同時に、彼らを追い込む理不尽さも積み重なっている。例えば、台風で吹き飛んだ屋根を少しの援助もなく自分で修理しなければいけなかったり、一家の大黒柱であるアムが怪我で仕事を休まざるを得なくなり、家族は飢餓と隣り合わせの生活を強いられたりするのである。本作品全体を通して、富裕層の人々は家政婦を雇い、その子供たちは夜な夜な街に繰り出してパーティー三昧の日々を送ることが上流階級の日常として描かれている。この点に注目し、死と隣り合わせで生活する家族がいる一方で、搾取する側に立つ人間たちは飢餓ということを考えたことすら無いと思うと、何ともやり切れない気持ちになる。間違いなく貧困層が貧困層のまま固定化される状況を作り出している人間がいるにも関わらず、「どんなわけでこんな所(悪臭が立ち込める長屋)に住まねばならなくなったのか。何が、誰が、彼らをこんなところに住むように仕向けたのかを問う人は昔も今もほとんどいない」(98 頁)と作者は嘆く。このような描写を通して、タイの対照的な二層社会が見て取れる。タイ社会では人間が上下二つの類型に分けられ、下の人は上の人を常に尊敬の念を持って接する。上の人間が持つ名誉は絶対的で、全タイ人が上に位置する人々に憧れの念を抱いているのだ(田中、1988)。本書からは、そのように明確に分類された社会の上と下が奇妙に同居しあっている状況を知ることができる。タイ社会の中間層が未だ不完全な時代に書かれた本書では、タイ社会が二つに分断され、対照的な人々が並存している時代を背景にして物語が展開している。

また、本書で父親であるアムが「サートゥ」という仏陀への祈りを口にする場面から、タイ社会での仏教の浸透性を感じることができた。タイでは古くから「ピー」という精霊の存在が信じられており、外来宗教である仏教は、そのような土着の信仰を包摂しつつ受容されていった(宮崎、2019)。タイでは国民のほとんどが仏教徒であり、国旗の白色の部分は上座部仏教を表している。後述する長編小説『罪との闘い』でも登場人物の女性が三宝の経を唱え、罪を清めようとする場面が描かれていることから、人々の暮らしに仏教の教えが溶け込んでいる様子を感じ取ることができる。

本書では、先述した『また会う日まで』のコメントの主張のように、農村部でいかに「お金持ちの旦那連中」に民衆が搾取されているかということが熱く綴られている。ある若者は「苦労して収穫した米は決まった道筋に添って流れ、お偉方に行き着くんだ」と吐き捨てるように述べる。そのような上流階級への不満に加えて、まさにコメントが言っていたように、農村部では貧しい者同士で助け合っていることが力説されている。本書を読む中で、コメントが上流階級の出身ながら、農村部の動向を的確に捉えていたことが分かり、彼がタイの社会構造を変えるために必死に勉強していることを感じ取ることができた。この農村出身の若者も、コメントのような考えを持って上流階級への不満をため込んでいることは明確である。この作品集の面白さは、一人の作者によって一定の目的を持って物語が書かれているため、独立した三つの作品が集まっているにも関わらず、それぞれの物語に繋がりや共通性が見いだせる点にある。読み返すうちに、同じような背景のもとで描かれた場面を想起することができ、一つの社会を様々な視点から見ているような気分を味わうことができる。

一家の父親であるアムは、このような酷い状況下に暮らし、人力三輪車でお金を稼いでいたわけであるが、ある日一人の客と出会う。その客に「民衆の力」の強さを説かれることで、アムの思考が一変するのだ。富裕階層や華僑のお金持ちなどに頼らずとも、貧乏人だけでも募金を集めれば十分な金額になり、互いに助け合うことができるのだと言い聞かされる。これを聞いたアムは、自分たちの地位に諦めを持っていた父親ではなく、民衆の力こそ、国全体に満ちているもので、それが持つ意味は大きいという新たな知識を持った人間になる。ここで重要な点は、アムのような下層階級に生きる人々は、教育というものをほとんど受けてきていないことだ。アムは「民主主義」という言葉の意味を知らず、政府または上流階級に抵抗することすら考えてもいなかった。しかし、アムが勉強を嫌って

たというよりはむしろ、政府や上流階級の人々は、アムのような底辺に生きる人々が教育を受け、知識を蓄えることを嫌っていたように思える。底辺階級の人々が知識を得るということは、『また会う日まで』のコメント、そして次に述べる『罪との闘い』のマナットのように、支配層に対して懐疑的な意見を持つ人々が増え、一方的な搾取が難しくなる状況が待ち受けることになる。これは支配層にとって最も避けたいことのひとつであろう。一人の客に一般民衆の力の大きさを説かれたアムは、それだけで今までと正反対の考えを持つ人間へと変化していったのだった。この作品も、シーブーラパーがオーストラリア留学を終えた後に執筆されている。『また会う日まで』と同様、訳者のあとがきにあるように、一人の人間の変化を通して、社会的不公平に目覚め、闘う意思を獲得する民衆の姿が描かれている。ここからも、オーストラリア留学がシーブーラパーに与えた影響の大きさが分かる。

最後に長編小説『罪との闘い』では、名門一家の長男が理解しきれない「愛」に翻弄され、彼が背負わなければならない「罪」と葛藤する物語である。本書は、オーストラリア留学前に書かれた作品であることから、社会変革を訴える内容は薄く、恋愛小説の要素がふんだんに盛り込んである印象を受けた。

本書では、真面目な兄と夜遊びに明け暮れる弟との対比で物語が展開する。兄のマナットは、毎晩遅くまで読書をし、自身の執筆活動に精を出す生真面目な性格である。対して弟のマヌーンは何度叱られても夜遅くに泥酔しながら帰宅するような手がかかる人物である。しかしながら、当時のタイの上流階級の若者は弟マヌーンのように酒や女性やトランプを楽しめるクラブに出向くなどして夜遊びに耽るのが普通だという。『また会う日まで』のコメントもタイにいた頃は、このような自堕落な生活を送っていたと告白しており、このような夜遊びは上流階級の子息にとって何の変哲もないことだったと分かる。その上、マヌーンに関しては、家政婦のジェンに対する破廉恥行為も目に余り、兄マナットが真っ向から否定する「自己中心主義」な若者なのである。このように、この兄弟は正反対の性格の持ち主として描かれており、「金持ちの家に生まれたのに、どうしてあれほど苦労して」(138 頁)勉強をしなければならないのかという弟マヌーンの発言のように、勤勉な兄と怠惰で放蕩を繰り返す弟が対比的に設定されている。だが、この当時はこうしたマヌーンの考えを支持する若者がほとんどだったのであろう。実際に貴族出身の彼らの母親も「子供を奴隷のように働かせる必要がどこにあるのか」(152 頁)とマナットのあまりの勤勉

さに自重を促している。ここから、上流階級の人々が保守的で固定的な考えに則って物事を見ていることを感じ取れるのではないだろうか。

そんな中でも兄は弟に対して、多くの本から吸収した様々な知識を織り交ぜながら、弟のためを思って説教する。兄マナットは名門貴族の家庭に生まれながらも、「貴族」という地位にうしろめたさを覚え、そして私欲を抱かぬ人物であった。このことは、彼の言動の一つ一つに表れている。重ね重ねになるが、三編全体から読み解くに、かつてのタイの上流階級に生まれた若者は、快楽を貪るような生活を享受するようだ。しかし、マナットは毎晩夜遅くまで読書に勤しみ、着々と知識を蓄えていった。勉強に励む中で、「公平な社会の実現」という理想を募らせていったのである。また、彼ら兄弟の父親も母親とは異なった意見を持っており、「近代的学問によってわが国は人間の平等に目覚めた」(152 頁)と学問の重要性について説く。この点に母親との対峙を読み取ることができ、兄弟間の対比だけでなく、夫婦間の対比も見える。兄マナットの発言や信条からは国の役に立とうとする姿がはっきりと示されており、シーブーラパー自身の思想を代弁しているように思える。

しかし、タイトルに『罪との闘い』とあるように、これは兄マナットの「罪」との闘いを記した作品だ。マナットはマヌーンとは対照的に優秀だと常に讃えられてきたが、一夜の過ちから家政婦のジェンを妊娠させてしまう。これは名門貴族の息子としては許されない行為である。ジェンの妊娠を知り、その子の父親が自分だと悟ったマナットは、弟マヌーンがジェンを妊娠させたことにする策略に加担する。しかし、最終的には、自らが犯した「罪」に耐え切れなくなり、家族のもとから永遠に姿をくらますのである。

本書では、マナットの思想の根幹にタイ社会の変革の必要性を説く要素を感じ取ることができるが、タイ社会の基底にある「親孝行」精神の観点からも、本書について考えることができるのではないだろうか。タイでは親孝行が最高善とされており、社会の根底には親に従順であるべきという規範がある。子どもにとっては親不孝と言われることが最大の屈辱だとされている(平松、2020)。例えば「母への尊敬と優しい思いがそれ以上の反抗を許さなかった」(170 頁)や「できる限り母さんの気持ちを大切にします」(170 頁)というような母親を尊敬するマナットの言葉が随所に見受けられる。また、弟マヌーンとその恋人ワンペンが深く愛しあっているながらも、ワンペンがマヌーンとの結婚に不安を抱えるのは、この「親孝行」の規範が関係していると考えられる。ワンペンの母親はだらしのないマヌーンの

ことをよく思っておらず、彼女は結局マヌーンと一緒にいる決心を捨ててしまう。ワンペンにとってマヌーンは「初めての真剣な恋の対象者」(144 頁)だったにも関わらずだ。これが日本の小説だったら、親の思いを吹っ切っても好きな人と駆け落ちをする展開が主流ではないかと思い、日本の文学作品との違いに加えて、タイ社会の根底にある親孝行規範の影響力の強さを感じた。

以上の三編を通して、対照的な要素を対比させながらストーリーが展開していく点が見どころだと感じた。『また会う日まで』ではタイ社会とオーストラリア社会が、『彼は目覚めた』では下流階級と上流階級が、『罪との闘い』では親孝行の兄と親不孝者の弟が対比されつつストーリーが展開されていく。どの要素もタイ社会を考察するにあたって必要不可欠なものであり、シーブーラパーの鋭い着眼点が伺える。

一冊の本を通して、シーブーラパーという人物の人となりを知ることができたと思うのは傲慢だろうが、彼がどのような考えを持ち、それを民衆に広めたいと思っていたのか、その一端を味わうことができた。社会的な不公平さに異議を唱え続け、民衆の力を信じた彼の姿が思い浮かぶ。タイは東南アジアの中でも特に社会格差が激しい国として知られている。2020 年に起こったタイの反政府デモは記憶に新しい。そのような現代の動向の中でも、シーブーラパーは文学者としてだけではなく、思想家、社会運動家として活躍したタイの知識人として、最も語られてきた人物である(宇戸、1988)。多くの著作を残した彼の存在は、タイの若者に勇気を与え続けているのではないだろうか。

今回取り上げた作品集『罪との闘い』の他にも、シーブーラパーの代表的な小説として『人生の戦い』(1932)や『絵の裏』(1937)などがある。これらを含めた彼の作品を読み込み、彼が人々に伝えようとしたメッセージを読み取ることが私自身の今後の課題だと考えている。激動の時代を生きたシーブーラパーの精神は、2021 年を生きる私たちにとってもきっと重要で新しい価値観を教えてくれるに違いない。

【参考文献】

- 宇戸清治(1988)「シーブーラパー『人生の戦い』について—その人間認識についての一考察—」『東京外国語大学論集』38, pp. 303-314
- 宇戸優美子(2014)「タイ人作家シーブーラパーの初期言論活動—1929 年から 1932 年立憲革命前まで」『アジア地域文化研究』11, pp. 170-192

田中忠治(1988)『タイ—歴史と文化 保護-被保護関係と倫理』日中出版

中央大学政策文化総合研究所監修(2002)『世界の教科書シリーズ 6 タイの歴史—タイ高校
社会科教科書』(柿崎千代訳)、明石書店

平松秀樹(2020)「タイ映画・テレビドラマ・CM・MV にみる報恩の規範—美徳か抑圧か、
『親孝行』という名のもとに」福岡まどか・福岡正太編『東南アジアのポピュラーカ
ルチャー—アイデンティティ・国家・グローバル化』(pp. 60-81)、スタイルノート

宮崎恒二(2019)「東南アジアの宗教」信田敏宏編『東南アジア文化事典』(pp. 212-213)、
丸善出版

